

Glocal Tenri



月刊 **グローバル天理** Monthly Bulletin Vol.11 No.5 May 2010

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

5

CONTENTS

- 巻頭言
海外伝道の推進力として
／深谷忠一 1
- 特別寄稿
おやさと研究所所長退任挨拶
／井上昭夫 2
- 天理教教理史断章 (53)
城尾文書③
／安井幹夫 4
- 天理教海外伝道の資料 (5)
上海伝道関連史料⑤
／深川治道 6
- 天理異文化伝道の諸相 (69)
コンゴ伝道に見る異文化接触 [35]
／森 洋明 7
- 今日の時代における宗教批判の克服学 (17)
宗教組織の経営を考える
／金子 昭 8
- ハワイ人とキリスト教：文化と信仰の民族誌学 (14)
表象と言説
／井上昭洋 9
- 宗教・国際協力・NGO (19)
SVAの歩み⑥
／野口 茂 10
- オーストラリア通信 (1)
映画評論：『サムソンとデリラ』
／土井幸宏 11
- 図書紹介 (51)
『静かなるホイッスル』
／難波真理 12
- English Summary 13
- おやさと研究所ニュース 14
研究報告会「台湾調査報告」／新所長紹介
／連載執筆者紹介／Tenri International
Conference 2010／アルゼンチン・ベネズ
エラ出張報告

巻頭言

海外伝道の推進力として

おやさと研究所長 深谷忠一 *Chuichi Fukaya*

2010年4月1日付で、井上昭夫前所長の後任として、おやさと研究所の所長を拝命しました。文字通り青天の霹靂であります。「ものを書くというのは恥をかくことだ」と言いつつ、教会の機関誌などには駄文を書きつらねてきましたが、2年前に会長職を長男に委ねてからは、文章を書くことすら殆どありませんでした。それが、突然この巻頭言を書けですから……井上前所長のような博識もヒラメキもない小生は、これから毎月どうすればよかろうかと思悩んでいるところであります。

ご承知下さっている方もあると思いますが、父忠政は天理教学確立の上に些かの貢献をいたしました。それで、その息子も教学に明るいだろうと良き誤解をして下さる方もありますが、事實は必ずしもそうではありません。「門前の小僧習わぬ経を読む」という表現もありますが、門内の小僧になると、「読経が子守唄にしか聞こえない」とか、反対に「昼寝の邪魔になって困る」ということもあるのです。この度のような立場を頂くのなら、もっと父の話聞いておけばよかったのにとありますが、後悔先に立たずであります。

さて、おやさと研究所の設立の趣旨について天理教二代真柱様は、「唯単なる研究機関ではなくて、海外伝道に関する後方の参謀機関として始めて生命があり、海外伝道の推進力として進まねばならぬ」と述べられております。

小生は、今からちょうど50年前に、アメリカ伝道庁長に就任した父と共に渡米いたしました。そして、カリフォルニアで高校、大学生活を過ごして以来、数年間のアメリカでの布教生活をはじめとして、生涯にわたって影に日向に海外伝道に携わってきました。ですから、学者・研究者としての下地・実績には欠けることは多なりとしても、海外伝道の実践の経験が、当研究所の目的達成の上に多少はお役に立つのではないかと。そう自らに言い聞かせて、おやさと研究所所長の責務を果たさせて頂こうと思巡らせております。

さらに、私事を申させて頂ければ、私の研究所長拜命と時を同じくして、小生の9人兄弟

姉妹の5番目の弟の深谷洋が、アメリカ伝道庁長を拝命しました。彼は父がアメリカ伝道庁長の時にロサンゼルスで生まれ、出生後すぐに日本に帰りました。高校の時に再渡米して大学卒業までをカリフォルニアで過ごしましたが、それ以外はアメリカではなく、シンガポールで出張所長として7年余、その他の時は日本におりましたから、アメリカの現地人そのものどとは申せません。しかし、本教で初めてその国で生まれた庁長が誕生したことには違いないわけで、このことが、本教の海外布教伝道が新たなステージを迎えるシンボリックな出来事になればと願っている次第であります。

海外伝道の最先端の立場を担う弟とその後方支援の兄というような麗しい構図になるかどうかは分かりませんが、海外布教伝道の現場の声を直接吸収するルートを十分に活用して、「後方の参謀機関」としての役割を果たせればと願っております。

海外部次長の永尾教昭氏が、『海外部報』の541号で、『「守り」から「攻め」の海外布教へ』と題して、「問題点を検討することは、過去、幾度となく行われてきている。そこから一歩踏み込んで、その解決策を書きものにして、長期戦略を立てられればと思う。それには当然、海外部だけで判断できないことも多くある。しかし、ことにつづかつたら、そこで思考を停止せずに、相談すべき人、部署に大いに足を運ぶ。その時には、若干の緊張感はある。(中略)ただ、それを回避していたら、いつまでたっても問題点の羅列だけで、ことが進まない。ことが進まない、多くの、特に問題を実感している各地の布教師たちの閉塞感はなくならない。閉塞感がなくなると、心が勇まず、心が勇まねば布教が進まないという悪循環に陥る。」と記されていますが、我がおやさと研究所も、海外部から頼りにして足を運んでもらえるような部署、攻めの海外布教に寄与する研究所になれるよう努めたいと思います。

この『グローバル天理』がその攻めの布教の推進力となるブルテンになることを願っている次第であります。